

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

若手精神科医の研修と相互交流の意義と課題
——学びの場，支えの場——

上原 久美（横浜市立大学精神医学教室大学院）

加藤 隆弘（九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野）

橋本 直樹（北海道大学大学院医学研究科精神機能講座精神医学分野）

和気 洋介（岡山大学病院精神科神経科）

田中 徹平（自衛隊佐世保病院）

馬場 俊明（北海道大学大学院医学研究科公衆衛生学分野，東京武蔵野病院）

藤澤 大介（慶応義塾大学医学部精神神経科）

（特定非営利活動法人日本若手精神科医の会）

はじめに

本邦では2004年に新臨床研修制度が施行され、すべての医師に精神科研修が義務付けられ、また、2006年には後期研修医制度が導入されて¹⁹⁾以来、全国の病院で研修制度を見直し、あるいは新たに構成し、より良い精神科医の育成に取り組んでいる。新制度では約4割が大学以外で後期研修をはじめており、これまで情報の核となっていた大学と関わらないまま後期研修を全うする医師も今後増えることが予想される¹⁸⁾。

日本精神神経学会（以下JSPN）第103回高知総会で開催されたシンポジウム「精神科医としての専門性について考える」では、精神科新臨床研修医から「施設によっても、医師によっても、治療法が異なり、戸惑う」「何をどこでどうやって学んでよいか迷う」「研修途上でいろいろな悩みを抱えるが相談する場がない」といった率直な声が聞かれた^{12,26,31)}。精神科医療及び精神医学の教育・研究が大きく変化している中、我々若手精神科医が積極的に研鑽を積み、また他の地域や施設の医師らと相互に交流し、広い視野を持って個々の現場に還元することは重要である。

本シンポジウムでは、この変革の時代に日本若手精神科医の会（Japan Young Psychiatrists Organization, 以下JYPO）が行ってきたさまざまな活動と意義や課題について紹介し、フロアから活発な質問をいただくと共に、今後を担う若手精神科医に対する期待が示された。

日本若手精神科医の会、設立

2002年、世界精神医学会世界大会とJSPN横浜総会の合同企画として開催された研修会をきっかけに、精神科医の学術的発展や国際的にアピールする能力の育成を目的としてJYPOが発足した²²⁾。以来佐藤光源先生、ノーマン・サルトリウス先生ら多くの皆様のご支援のもと、全国各地から、専門性・指向性が異なる若手精神科医同士が集い、各種研修会、多施設研究、国際活動などを行っている。そしてこれらの活動を通じて、知識の向上や技術の習得のみならず、若手精神科医同士が研修途上の悩みを共有し、解決の糸口を模索する場を提供している。現在は大学病院、研究施設、単科の精神科病院など多くの分野で活躍する若手が会員となり、相互に交流しながら研修会や

多施設研究を实践し、今後の精神医療の発展に寄与すべく努力している³²⁾。以下に、その活動の主要なものを紹介する。

主な活動

1. 学術的発展のための企画

1) Course for the Academic Development of Psychiatrists

2002年以降毎年開催している、学術的発展のためコースである。医師は、一人ひとりが医学を担う臨床家であり、学術的発展に寄与する研究者であり、また地域での医療チームのリーダーとなる。本企画では講師にノーマン・サルトリウス先生をはじめ多数講師陣をお招きし、研究手法や国際学会での発表や座長の仕方、論文の批判的吟味、国際会議の運営技術などを合宿形式で学ぶことができる。本企画の初回の詳細は中川敦夫先生に、近年の内容は松本良平先生の報告に譲りたい。

2) 医療統計ワークショップ

慈恵病院の佐藤創一郎先生を中心に2003年に始まり、以来毎年開催している企画である。昨今、医学文献が入手しやすくなり、精神医療でも Evidence Based Practice (Medicine) が常識となったが、溢れる情報から目的の情報を検索し、医療統計学的知識をもって批判的に吟味し、臨床応用することは容易ではない。また、文献検索の技術や医療統計の方法は常に発展しており、新しい知識を習得することは重要である。本ワークショップは、医療統計の理論と実践を学ぶと共に、その知識に基づいたよりよい文献の吟味の仕方や研究方法を模索し、あるいは新たな視点について学び、今後の精神医療の発展に寄与できる若手を育成することを目的としている。本企画はこの分野をリードするエキスパートや、その分野で研鑽を積んでいる若手会員がそのテーマごとに講演、実践指導を行う全員参加型の企画である。

3) 新版 PANSS 研修会

2003年、全国に先駆けて新版 PANSS (Positive and Negative Symptom Scale) の研修会を行っている。新版 PANSS の作成者の1人であ

る Paul Ramirez 先生による研修会を開催し、国際標準の精神症状評価を身につけることだけでなく、活発な議論を通して全国の若手が症状を評価する時の視点を知り、自らの臨床に生かすことを目的としている。また、新版 PANSS は都立松沢病院の高橋克昌先生、慶應義塾大学の藤澤大介先生を中心に翻訳し、2008年より本邦で正式に使用されている。

4) 国境を越えた研修会に関する情報提供

国境を越えた企画は JYPO 以外にも多数存在する。ことに福岡大学名誉教授の西園昌久先生と啓耀医療財団神経精神医学研究所の関秉根先生「日韓両国の若い研修医のための研修会」は2000年から続く大変意義深い企画である。詳細は平久菜奈子先生に譲るが、こういった研修会の情報をインターネットを通じて紹介し、若手の参加を促している¹³⁾。

5) 学会における研修企画

学会において、国内外の若手を対象とした研修会やワークショップを企画し、あるいは会員に情報提供し、学術的発展を目指すと共に国内外で活躍する若手同士の情報交換を推進している(詳細後述)。

2. 学術集会における若手のための情報提供

1) 国内学会での主な活動

2002年設立以来毎年 JSPN 総会において若手のシンポジウムを企画し、現場の若手からの声を発信している^{6,7,9-12,15,16,21,23,24,26,28,31,33)}。また、近年の国際化の流れの中、学会や研修会で海外の若手演者と日本の若手が討論する場を設けている。第104回 JSPN 総会でも、本シンポジウムのほかに NTT 東日本関東病院の秋山剛先生と共に研修コースや(前述)、JSPN が招聘したアジア各国若手との精神保健法と行動制限の実際や卒後教育についてのワークショップを、九州大学の加藤隆弘先生、北海道大学の馬場俊明先生中心に企画している。

2008年の老年精神医学会神戸大会においては会長の神戸大学、前田潔先生より若手ミニシンポ

ジウムを開催する機会をいただき、横浜市立大学名誉教授の小阪憲司先生と札幌医科大学の館農勝先生を座長に、全国の老年期精神医療の分野で活躍する若手から、老年精神医学の重要性、奥深さ、若手精神科医に伝えるべきことなどについて議論した。

また、会員が北海道精神神経学会のシンポジウムや神奈川県精神医学会のワークショップ「口頭発表のコツ」を開催し、技術やネットワークを地域に還元している²²⁾。

2) 国際学会

若手精神科医にとって国際学会への参加は敷居が高いものである。研究を行ったとしても英語の壁や発表技術への不安もあり、また国際学会に行っても個人ではなかなかネットワークを広げるには至らない。そのため国際学会では若手のための研修プログラムや情報交換会など様々な形で若手の参加を援助している。当団体では世界各国で企画されている若手の企画や援助についてよせられた情報をインターネット (<http://jypo.umin.jp/>) で紹介することにより、若手が国際的な活動に参加しやすい環境を提供している。以下にこれまで情報提供してきた代表的な企画を紹介する。

① WPA フェローシッププログラム

WPA では毎年 40 歳未満、あるいは臨床研修 5~10 年という若手精神科医を対象としてフェローシッププログラムが企画されている。筆者も JSPN から推薦を受け、WPA イスタンブール大会のフェローシッププログラムに日本のフェローとして参加した。各国の若手精神科医との症例検討や情報交換の企画を通し、世界の精神医療の多様性に驚き、その普遍的な部分にもまた気づくようになった。

② World Association of Social Psychiatry 世界社会精神医学会 (WASP) 神戸大会

2004 年 10 月の学会期間中、長崎国際大学中根允文先生らのご支援のもと若手シンポジウムを企画し、通訳などで運営に協力した貢献が認められ、表彰されたことは JYPO にとって大きな励みとなった。

③ 環太平洋精神科医会議

2006 年台湾において開催された第 12 回環太平洋精神科医会議では十数名の会員が参加し、シンポジウムで活発な意見交換を行った³⁴⁾。この経験を元に、2008 年には東京で開催される第 13 回環太平洋精神科医会議に先駆けて学会公認で JYPO 主催のフェローシッププログラムを企画した。学会でのシンポジウムや研修会を企画してきた経験を活かし、各国の若手を招聘し Allentasman 先生、野田文隆先生、秋山剛先生をはじめ、国内外のエキスパートや環太平洋精神科医会議にご協力いただきながら準備を進めている。研修や医療事情の紹介、症例検討などを通して精神医療について討議し、学術的発展と協力体制の構築を目指した企画を通して情報交換を行い、今後の地域医療について考える企画とした。

JYPO ではこのよう場で培われたネットワークを多くの国際多施設研究や国際研修企画、学術企画に生かしている。また、こういったプログラムに参加した会員が本誌や会員用ホームページで報告し、次の若手のための情報提供を行っている^{20,27)}。この広がり是国内にとどまらず、韓国、台湾、インドなどアジア各国でも若手精神科医の団体が組織され始めている。そして、個人の交流では成しえない、継続的で広がりのある活動が実現されているのである。

3. 多施設研究

JYPO では全国の若手精神科医のネットワークを活かし、多くの多施設研究を実践し、あるいは協力してきた。ここにその一部を報告したい。

1) 精神科受診経路に関する多施設研究

2003 年から慶應義塾大学の藤澤大介先生、岩手医科大学の大塚耕太郎先生を中心に精神科受診経路に関する全国 15 施設の多施設研究を実施し、精神科を訪れる人がどのような経路で受診しているかを明らかにした^{14,30)}。この研究は国内外の学会で報告しており、またパニック障害の患者に関する受診経路の研究などにも発展している (厚生

労働省のこころの科学研究「パニック障害の身体的・心理的成因の解明と治療ガイドラインの策定(主任研究者:久保木富房)」のうち、「パニック障害の受診経路に関する研究(分担研究者:大野裕)」)。また第13回環太平洋精神科医会議では北海道大学の橋本直樹先生を中心に国際シンポジウムも企画している。

2) 初期研修医及び後期研修医における卒後教育に関する意識調査

臨床研修医制度の改変に先駆け、横浜市立大学の佐藤玲子先生を中心に初期研修医に対する意識調査を行い、研修医が何を研修に望み、また何を学んだのか、といった事柄を示した¹⁷⁾。また、専門医研修に先駆け九州大学の加藤隆弘先生を中心に若手精神科医の卒後研修に関する意識調査を全国のJYPO会員や北海道精神神経学会、神奈川精神医学会の協力を得て行い、若手が望むものは何であるかを報告している⁸⁾。

3) 診断や薬物療法に関する意識調査への協力

JYPOでは会員の多様性を活かして全国の多施設調査を実施または協力している。ICD-11に関する意識調査^{1,25)}に防衛医科大学の長峯正典先生を中心に協力し、また地域における処方調査^{5,29)}でも第一線で勤務する若手精神科医ならではの意見を発信すべく参加している。

4) 精神科医の仕事と家庭の両立に関する意識調査

東北精神神経学会の協力の下、東北大学の菊地紗耶先生を中心に、精神科医の仕事と家庭の両立に関する意識調査を行っている。精神科医の現在の勤務の状況、勤務負担および仕事と家庭の両立に関する諸問題について調査したいという地域の声から若手精神科医を中心に企画され、精神科医療の抱える課題を明らかにし、今後の地域精神医療の発展に寄与すべく現在調査が進行している。

5) 行動制限に関する研究

2008年には行動制限に関する研究チームが立ち上がり、横浜市立大学の杉浦寛奈先生を中心に、各国の現状、取り組みや課題を共有し、最適な行動制限のあり方を明らかにすべく活動している。

第13回環太平洋精神医学会に先駆けて開催するthe Fellowship Program for Academic Development of Psychiatrists における国際症例検討会も企画している。更に、札幌医科大学の館農勝先生を中心に国内の現状と現場意識についての調査が日本精神・神経科学振興財団の助成を受けて進行している。

4. 偏見除去のための啓発活動、研究協力

偏見への取り組みや精神医療の歴史に関する本の翻訳を通して啓発に努めるほか^{2,3)}、文部科学省科学研究費補助金事業「精神科的早期介入と偏見除去のための臨床研修医への短期教育法の効果に関する介入研究」におけるメンタルヘルス・ファーストエイドのプログラム作成に協力するなど、さまざまな場面で偏見除去のための活動に従事している。

このように、発足以来若手精神科医の学術的発展を目的とした多数の学術集会を開催し、卒後教育や精神科医の職場環境に関する調査など、全国で若手が取り組むべき課題について、若手の立場から多施設研究を実施している。また、特定非営利活動法人となってからは、研究を主催するだけでなく、活動主旨に合致する研究へも協力し、精神医療の発展に寄与すべく活動している²⁾。

特定非営利活動法人日本若手精神科医の会設立

JYPOは、2008年5月「精神科医療に携わる日本各地、世界各国の若手精神科医の学術的発展と交流、社会への啓発活動を通し、質の高い精神科医療を日本各地、世界各国に普及させることにより、精神疾患を抱える人びとやその家族、地域の人びとが安心して生活できる世の中をつくること」を目的とし、ノーマン・サルトリウス先生、佐藤光源先生を顧問にお迎えし、特定非営利活動法人として新しいスタートを切ることとなった。

謝 辞

JYPOは、今まさに研鑽を積み、今後の精神医療を担う

立場にある若手精神科医の研修の場、支えの場として全国の会員と共に活動を広げてきた。まだまだ未熟な私たちが国内外の団体と連携しながら活動を継続し、法人化という節目を迎えることができたのは、意欲に溢れる会員の努力と、若手の発展に期待し見守ってくださるエキスパートの先生方の温かいご支援の賜物であり、この場を借りて心より御礼申し上げたい。特定非営利活動法人として新しいスタートを切った今、若手だからこそできることを模索しながら共に成長し、日本の、そしてアジアの精神医療の発展に少しでも貢献できればこの上ない喜びである。

文 献

- 1) Mellsop, G., Banzato, C., Shinfuku, N., et al.: An International Study of the Views of Psychiatrists on Present and Preferred Characteristics of Classifications of Psychiatric Disorders. *International Journal of Mental Health*, 36 (4); 17-25, 2007
- 2) Kitchener, B.A., Jorm, A.F.: *Mental Health First Aid Manual*. ORYGEN Research Centre, Melbourne, Australia, 2002 [こころの救急マニュアルプロジェクトチーム. こころの救急マニュアル (Mental Health First Aid-J). 2007年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)). 精神科的早期介入と偏見除去のための臨床研修医への短期教育法の効果に関する介入研究. 分担研究協力報告書. 2008]
- 3) Sartorius, N., Schulze, H.: *Reducing the Stigma of Mental Illness*, Cambridge University Press, Cambridge, 2005
- 4) Sartorius, N.: *Fighting for Mental Health*. Cambridge University Press, Cambridge, 2002
- 5) Yoshimura, R., Okamoto, T., Nakamura, et al.: Prescription pattern of antipsychotic drugs for schizophrenic inpatients in Japan: Research on East Asia Psychotropic Prescription Pattern-Antipsychotics study. *Psychiatry Clin Neurosci*, 60 (6); 778-779, 2006
- 6) 今村弥生, 石井貴男, 今井智之ほか: 東北北海道地域から地域精神医療の可能性. *精神経誌*, 108 (9); 957-960, 2006
- 7) 上原久美, 尾鷲登志美, 須田 顕ほか: 若手精神科医の立場から精神科医療を考える—精神科医療の現状と地域の抱える課題—南関東4都県における精神医療の現状と課題. *精神経誌*, 108 (9); 979-981, 2006
- 8) 上原久美, 杉浦寛奈, 鎌田鮎子ほか, 日本若手精神科医の会 (JYPO) 卒後研究班: 神奈川県における卒後研修に関する意識調査. *神奈川県精神医学会誌*, 57; 75-81, 2008 (資料)
- 9) 上原久美, 藤澤大介: 若手精神科医の立場から精神科医療を考える—国際活動を通して見えてきたもの, JYPO (日本若手精神科医の会) の国際活動を通して. *精神経誌*, 107 (8); 890-893, 2005
- 10) 岡村斉恵: 日本の若手精神科医の期待II「若手精神科医の研修に望まれるもの」. *精神経誌*, 106 (4); 472-473, 2004
- 11) 大野 裕, 中川敦夫: (シンポジウム) 若手精神科医からみた21世紀の精神医学—卒後教育研修を中心として—. *精神経誌*, 106 (4); 467-468, 2004
- 12) 加藤隆弘, 橋本直樹, 佐藤玲子ほか: 専門性を獲得する途にある若手精神科医の現状と課題—精神科研修及び精神医療精神医学に関する意識調査—. *精神経誌*, 109 (11); 1045-1049, 2007
- 13) 加藤隆弘: 若手精神科医における異文化交流の意義—『日韓両国の若い精神科医のための合同研修会』に参加して—. *精神経誌*, 108 (11); 1194-1200, 2006
- 14) 小泉弥生, 藤澤大介, 橋本直樹ほか: 精神疾患に対する一般身体科医による病名の告知説明と関連因子について—精神科受診経路に関する多施設研究の結果から—. *精神経誌*, 109 (11); 1008-1021, 2007
- 15) 小泉弥生: 日本の若手精神科医の期待I「若手精神科医の希望と実際」. *精神経誌*, 106 (4); 469-471, 2004
- 16) 佐藤創一郎: 海外の若手精神科医の期待—WPAの経験から. *精神経誌*, 106 (4); 474-479, 2004
- 17) 佐藤玲子, 加藤隆弘, 末永貴美ほか: 新医師精神科臨床研修のアウトカム評価—日本若手精神科医の会の多施設調査結果から—. *精神経誌*, 109 (11); 1072-1081, 2007
- 18) 清水徹男: 後期研修期間における精神科研修の課題と対策. *臨床精神医学*, 36 (3); 247-250, 2007
- 19) 社団法人JSPN 精神科専門医制度規則
- 20) 杉浦寛奈: 第一回世界アジア世界医科学会 (First International Congress of Asian Psychiatry) 学会印象記. *精神医学*, 50 (3); 306-307, 2008
- 21) 鈴木友理子: 地域社会へ働きかけを行っている若手精神科医の立場から. *精神経誌*, 109 (11); 1033-1038, 2007
- 22) 館農 勝, 橋本直樹, 田村義之: 日本若手精神科医の会 (JYPO) の活動について (第104回北海道精神神経学会例会シンポジウム: 「新医師臨床研修制度に向けて」). *精神経誌*, 106; 1076, 2004

- 23) 館農 勝: 第13回世界精神医学会カイロ大会への抱負. 精神経誌, 107 (6); 607-611, 2005
- 24) 中川敦夫: 日本の若手精神科医の会の発展と期待. 精神経誌, 106 (4); 480-482, 2004
- 25) 長峯正典, 勝 強志, 加藤隆弘ほか: 日本における精神科疾病分類 (ICD および DSM) に関するアンケート調査—New Zealand との比較も踏まえて—. 精神医学, 49 (10); 1045-1052, 2007
- 26) 丹羽真一, 加藤隆弘: シンポジウム: 精神科医としての専門性について考える—専門性を獲得する途にある若手精神科医の現場からの声—. 精神経誌, 109 (11); 1023-1024, 2007
- 27) 橋本直樹, 杉浦寛奈, 長峯正典ほか: 2007年WPA アジア地区大会に参加して. 精神経誌, 110 (3); 175-177, 2008
- 28) 橋本直樹: 北海道の地方都市での地域精神科医療の体験. 精神経誌, 108 (11); 1178-1183, 2006
- 29) 藤井千太, 館農 勝, 大塚耕太郎ほか: 向精神薬処方地域格差: 精神医療, 38; 017-025, 2005
- 30) 藤澤大介, 橋本直樹, 小泉弥生ほか: 精神科受診経路に関する多施設研究—パイロットスタディ—. 精神医学, 49 (1); 7-15, 2007
- 31) 藤澤大介: 2005年世界精神医学会 WPA カイロ大会にむけて—日本の若手精神科医からの期待—プライマリケアへの提言. 精神経誌, 107 (6); 599-603, 2005
- 32) 藤澤大介: 若手精神科医の会のはなし. 心と社会, No.120 36 (2); 2005
- 33) 宮島加耶, 藤澤大介, 中川敦夫ほか: 大学病院での精神科研修について—新制度後期研修を始めた新しい精神科医第一号の立場から—. 精神経誌, 109 (11); 1039-1044, 2007
- 34) 和気洋介, 佐藤創一郎, 橋本直樹ほか: 12th Pacific Rim College of Psychiatrists (PRCP: 環太平洋精神医学会) Scientific Meeting および Mental Health Policy Workshopに参加して. 精神経誌, 109 (10); 921-924, 2007
-